

浄華衆

如来浄華衆 正覚華化生 (往生論)

一。これは浄土莊嚴成就を説ける偈の中、国土莊嚴十七種の中、莊嚴眷族功德成就を説かれたものである。私は長い間、浄土の莊嚴について語ることが多かつたために、ほのかに如来浄土の報土たる意味、願心莊嚴の意を頂けるようになったことを有難く思わないではいられない。わけてもこの莊嚴眷族功德成就は、いよ／＼限りなく有難く感ぜられるのである。

二。この眷族功德成就は、国土莊嚴十七種中にあるもので、国土の徳をその眷族の上に見ようとせられるのである。国土の徳は浄土の大衆の上に成就しなければならぬし、大衆の徳によつて国土の清浄功德が示されるのである。

三。曇鸞大師は、この「如来浄華の衆」を釈して

「同一に念仏して別の道無きが故に、遠く通ずるに夫れ四海の内皆兄弟とするなり。」

と説かれた。そこで『安心決定抄』には

「他力の大信心を得たる人を浄華の衆とはいふなり。」

と示された。大信心の行者は、「同一念仏」の世界に住むのである。生死海にありつつ、浄土の光に攝取せられて、「如来浄華の衆」となれるものである。

念仏行者は、如来浄土の眷族であるとは、心して頂くべきである。

四。多くの人が集つて、念仏を称えてさえおれば、同一念仏の世界にいるのではない。人間が仲よくさえしていたら同一念仏の世界にいるのではない。如何に今仲よくしているようでも、それが愛である場合は、必ずお別れの日がある。ここに於て、同一念仏の世界ということが「我等」の世界即ち人生に深い意味を持つて来るのである。

五。信心は清浄願往生心である。如来の清浄なる本願力によつて廻向せられたものなるが故である。

しかるに凡夫の一生は、三毒を以て終始するが故に、「懇親」と「隔執かくしやく」より外に、人と人との交渉を持たぬものである。性格が合つたり、利害が一致したり、愛を感じたりすれば、その心によつて懇親を結び、その反対に憎悪を感じる者とは、隔執の溝を造る。隔執と懇親こそは、凡夫の煩惱の二相である。

油断すると、念仏の世界に於てすら、同一念仏の名において、好いた者同志の懇親会を開いて、それで同一念仏の世界の有難さの如くまちがえる。

六。真実の教を通して、清浄なるみ光に照されると、懇親も隔執も人を傷つけることがわかり、それでは決して同一念仏ではないことがわかって来る。片手では人と懇親を結び、片手では人を隔執によつて退ける、その相を静かにみ光によつて内観凝親して超えなければ、同一念仏の世界は現われて来ないであろう。信心を智慧と言われるゆえんがそこにある。

七。同一念仏の世界は、一人一人が独りで歩ませて頂く世界である。お互がお互に煩惱の手を出して結ばれるのではない。

『唯信抄文意』には

「唯はたゞこのこと一といふ。二ならぶことを嫌ふ語なり。また唯はひとり、といふ意なり。」

と仰せられる。このひとりということとは、孤独というこゝろではなくて、独立ということゝろでの「ひとり」であろう。ひとりひとりが真実信心の世界に生かされるのである。それによつて、相手と結ばれようと手出しをしないで、おたがいがおたがいで合掌したまゝ、自然に一つに結ばれる世界である。

八。如来浄華衆の浄華とは、如衆のよつて坐したまう華座のことである。即ち、蓮華座のことである。蓮華座を中心にして、その上に如来をつけて、如来浄華といい、下に衆をつけて、浄華衆という。であるから、浄華は、如来のよつて立つ絶対人格の王座であると共に、衆を化生せしめる唯一の力である。

浄土の衆は、如来浄華より化生するのである。一より生れたる多である。もし浄華にして、無量の眷族を生まないならば、浄華ではない。されば如来即ちこれ浄華であり、浄華即ちこれ衆である。

九。唯一の浄華より生れる眷族であるから、浄華衆と言われるのであり、同一念仏の世界と言われるのである。如何に無数の衆であつても、唯一の六字が廻向せられて、それに生かされるものであるが故に、兄弟とせられるのである。

であるが故に、それぐゝの人がそれぐゝで手を結ぶのではなくて、唯一の浄華において結ばれるのである。

一〇。兄弟は、それがどれだけ遠く隔たつていても、同一の親を念じて生きる。それだから兄弟なのである。しかし、同一の親を念ずる以前に、同一の親に念ぜられているのである。同一の仏に念ぜられる、その仏念によつてのみ、真実の念仏は生れる。仏念即ち念仏となつた時、念仏は真実となるのである。

一一。甲の宗教団体や、宗教家に人間的な反感を持った人が、乙の宗教団体や宗教家のもとに走つて、甲に対する不平や反感を勝手な独断を雑えて訴えた時、乙がそれに共鳴したり、加勢したりして、己れが味方だと考え、それをそのまま許したり、近よせたりすると、爆弾を抱いたようなものである。必ず後には困つたことが起る。

困ったことが起きないで、その為乙の団体の勢力がよくなったとしても、乙はそれだけ不純な汚いものになる。それをそのまま許す所に乙自身に不純がある。

我らの集りは決して、かかるものをそのまま受入れてはならない。世のいわゆる同行は、甲の宗教家に対する反感を乙に訴え、乙に対する不平を甲に移して、中間不善の輩となるものが多い。それを真に受けて跳つた者は、妄念と一人角力を取って怒っている。たとえば、「光明団には聖典を造つて、それを団員に売りつけて金をもうける」ということを真に受けて怒号した人のように。事實は、島地大等師編の真宗聖典を用いているのに。

恐れなければならぬのは、誤解ではなくて、事實、我らの集りが清浄真実の信心の人でないことである。

一二。盛んであることを求めるよりも、清浄であり、真実であり、純粹であることを求める。それが我らの団の唯一の目標であり、信条であつた。

一三。真実のみ声を聞き、真実を求め、真実の一道を貫こうとすれば、必ず、非難がおき、誹謗が現われ、迫害される。

そしたらさらに真実に、それでもなお悪罵されるならさらに真実に、さらに強く真実に、それでもく困難なら、なおさら真実に進め。いよく真実に、そしてさらに真実に、最後まで真実に。我らの歩むべき道は一本であり、必然である。

一四。浄華衆、即ち如来浄土の眷族は、如来の正覚華から生れて、如来正覚華の尊さを顕現するものである。如来から生れて如来の清浄功德を人生に具体的に示すものである。だから浄華衆と言われるのである。

一五。日本の真の国民は、畏れ多くも、上御一人の大御心より誕生するのである。個々の人間の英雄主義や、利己主義や、名利心や、等々をひつくるめた、「我心貪著自身」からは遂に一人の日本国民も生れては来ない。色々な主義や、思想が清算さるべく問題になるのは、それが為である。

一六。日本の荒鷲は強い。何故に強いのか、眼に見える飛行機に乗っているままに、もう一つ眼に見えぬ飛行機に乗っている。敵地の空に華と散つても、散ることなき国体の精華といふ華に。

一七。如来の莊嚴功德八種の第一は莊嚴座功德成就というのである。

無量大宝王 微妙浄華台

と論には讃えられている。觀經の第七華座觀に説かれるところの大宝蓮華王座のことである。八万四千の葉が、百宝色はなびらを作し、一一の葉に八万四千の脈あり、二の脈に八万四千の光あり、一一の葉の間に、百億の摩尼珠がある。摩尼珠とは、無垢、離苦、如意等と訳される。この宝珠は龍王の頭の中より出で、願いによって何でも自由自在

に出すことが出来るから、如意珠と言われるのである。仏のよって立つ所の台を、釈迦毘楞伽宝と言われる。訳して能種々現如意珠と言われる。珠寶の王である。その外無量の宝珠が説かれ、四角すみに立つ四柱の宝幢は、百千万億の須弥山の如く、幢の上のまん幕は、夜摩天宮の如く、五百億の微妙の宝珠ありて飾られている。こうした、数量の極限を以て説かれる蓮華座こそ、本仏のよって住したまう座である。

蓮華座のこうした無量の宝の唯一無上絶対を現して「無量大宝王」というのである。

一八。仏法で宝とは「功德」のことである。だから蓮華座をも、莊嚴座功德成就と呼ばれるのである。功德大宝海というのも、如来の絶対功德を海に喩えられたのである。

如来は絶対功德の人格の王座にましますのである。

徳より外に人格はない。

一九。微妙浄華台。清浄を微妙の体とする。

清浄とは、涅槃の常楽我浄の徳、四徳中の浄をいうのである。したがって清浄とは涅槃の徳、真如の徳である。この蓮華座は法性真如の徳そのままの清浄功德であるが故に、浄華と言われるのである。

二〇。微妙とは、微は法性真如の徳より現われたる莊嚴相、即ち妙有は、最極微細として、えも言われぬ尊さであつて、麤悪そあくを離れたるものであるから、微というのである。妙とは能く衆生を開悟せしめることを妙と云うのである。

であるから微妙とは、自利利他、二利円満するをいうのである。

一一。自利のまんまが利他、利他成就しきつての自利。自利利他一如の正覚、その正覚の報であるが故に浄華と言われる。自性、諸の塵垢を離れたること、蓮華の泥中にありつつ、泥に染まぬが如くである。

この微妙浄華台によつて如来は正覚を成就し、衆生はその大用に摂取されて救われるのである。

二二。仏は蓮華を以てその所座としたまう。座とは依持を義とする。すべては座に依つて持たもたれて座するのである。

無量大宝王即ち如来所座の微妙浄華台である。されば座功德は、寂靜不動の義を成就する。

如来の所座のみ、三界火宅の無常無安、流転動乱を超えたる寂靜不動であり、安穩である。如来の正覚華のみ安穩である。

二三、觀經の華座觀を説ける文には、特に「如此妙華是本法藏比丘願力所成」と説かれてある。

これ誠に、画龍点睛というか、金的きんてき、要の重大文字である。

もし如何に如来華座の尊高が説かれようと、それが菩薩の願心莊嚴の妙莊嚴でないならば、一切衆生とは何の交渉もないものである。願心莊嚴、願力所成の文字あるが故に、その一相一光、如何なる脈一本も、衆生利他の方便に非ざるはないのである。私のものでないものはないのである。

二四、願力所成の正覚華である。

本願は本よりこれ生仏不二一体である。

同一のものが如来の上に正覚を、衆生の上に往生成仏を成就するのである。これ即ち生仏不二の正覚である。であるから、仏の所座は、そのまゝ衆生の所座である。これを第十八願の世界というのである。

二五。如来の眷族は正覚華より化生す。

真人格は必ず真人格から生れる。

如来唯一の絶対人格の王座から、恒沙無量の諸仏菩薩という、真人格を化生する。

二六。『安心決定妙』にいわく

「正覚華といふは、衆生の往生をかけたものにして『若し生れずば正覚を取らじ』と誓ひたまひし法蔵菩薩の、十方衆生の願行成就せしとき、機法一体の正覚成じたまへる慈悲の御心のあらはれたまへる心蓮華を正覚華とはいふなり。」

これでは「機法一体の正覚成じたまへる慈悲の御心のあらはれたまへる心蓮華を正覚華」と云つてある。

大慈悲の御心、心蓮華、蓮華とはまことに大慈悲の仏心をさすのである。仏心より誕生するものこそ、仏子であり、菩薩である。

二七、

「設ひ我仏を得んに十方衆生、至心に信樂して我が国に生れんと欲し、乃至十念せん。若し生れずば正覚を取らじ。」(第十八願)

この本弘誓が成就して正覚を取りたまひし南無阿弥陀仏なるが故に、「正覚」の中のみ、若不生者不取正覚と、私の自覚往生のすべてが成就しているのである。であるが故に、ただ合掌して御本意を聞信するのである。ああ、仏の大宝蓮華王座が、そのまゝ念仏の我が所座となりたまうとは。報ずべし。恥づべし。「覚」の一字の尊き哉。

二八。

「これを第七の観には、除苦惱法と説き、下下品には、五逆の衆生を来迎する蓮華と説くなり。仏心を蓮華と譬ふることは凡夫の煩惱の泥濁に染まざるさとりなる故なり。」(安心決定抄)

まことに観經第七華座観を開説するに當つては、世尊は「苦惱を除く法」と仰せられた。

我らはここにも考えさせられる多くのものを頂くことである。

苦悩の衆生は、顛倒の妄想によつて自らの苦悩を除こうとする。その顛倒の迷心邪信はます／＼苦悩を増加せしめこそすれ、除いてはくれない。

しかるに、如来絶対人格の王座、大宝蓮華王座こそ、除苦悩法であるとは頂くべきことである。

病苦は、妖しい祈祷や、姑息な手段によつて治るのではない。病源の除去より外に、病苦の除きようはない。

如来絶対人格の王座が、衆生の上に真実の自覚を成就して、その病源たる自力我慢を根治して、真人格を成就するより外に、衆生の苦悩は救われないのである。

二九。親経の下身下生の往生には金蓮華が行者を来迎している。この金蓮華こそは、仏の大宝蓮華王座のことであると説かれるのである。最尊最高絶対なるものが、下身下生極悪底下の悪人の上に回向せられて、一念に救いを成就するのである。真宗教の極致である。

三〇。古歌に云く、

「苦しみの海をもやすくわたるべし 南無阿弥陀仏の船にのりなば。

穢土ながらここも蓮の台なり 弥陀たのむ身はねざめ嬉しき。」

身を以て仏凡一体の妙境に安住した人の歌であろう。

三一。「世間虚仮 唯仏是真」、如何にこの世が煩惱の泥濁に染み穢れていようとも、仏心の蓮華だけは、この泥に染まぬ清浄心である。念仏の人を「是人名分陀利華」と讃えられるのも、また、然るべきことである。分陀利華とは白蓮華である。まことに念仏の眞の行者は人中の白蓮華である。

三二。無量寿仏は大宝蓮華王座を以て仏座となしたまうのであった。

曇鸞大師はその興由を示して、

「仏、本、何が故に此の座を莊嚴したまへる。有る菩薩を見たまうに、末後身に於て、草を敷いて坐として阿耨多羅三藐三菩提を成ず。人天見る者、増上信、増上恭敬、増上愛樂、増上修行を生ぜず。是の故に願じて言く。我成仏せん時、無量大宝王微妙浄華台をして以て仏座となさしめんと。」

と説かれた。

三三。有菩薩とは、一生補処の菩薩、即ち三大阿僧祇劫の修行行満して、金剛喻定に入り、一切の煩惱を断じ尽くして、無上道を成じて仏となる菩薩のことである。

この菩薩は、「敷草而坐」と言われる。大経のいわゆる「道場に往詣し、吉祥感徴して、功祚を表草し、哀れんで施草を受け、仏樹の下に敷き跏趺して坐す。」と説かれるのがこれである。

応身仏が生死海に於て成仏する時には、菩提樹等の下に草の座を敷き、その上に端坐して正覺を成就せられるのである。

三四。応身仏が草座に坐して成道するのを衆生が見ても、増上信、増上恭敬、増上愛樂、増上修行の念をおこさないと言われるのである。

すると、その言葉は、それ故に願をおこして成就されたる本仏の大宝蓮華王座のみが、一切衆生をして、増上信、増上恭敬、増上愛樂、増上修行を成就せしめるということをして反顕しようとせられるのであることが知られる。

三五。増上とは殊勝ということである、信、恭敬、愛樂、修行の四は如何なる意義を有するかをいえば、次の如くである。

総・・・信

恭敬・・・身業

別・・・愛樂・・・心業

修行・・・身心を以つて如実に教に随順して修行すること

如来の大慈悲によつて衆生の上に發起するものは、総じて言えば「信」である。その信を別して言へば、恭敬、愛樂、修行となるのである。さればこの三者は信の具体的内容である。

三六。信にして恭敬がなければ眞實の信ではない。恭敬とは、恭は自らの頭を下げて卑謙へいけんすること、敬は相手の徳をおし上げて尊敬すること。もしこの恭敬の徳が身業に現わるるまで、心内に巣くう邪見憍慢が対治せられなければ、信心は成就しない。龍樹和讃には、聖人は、

「不退のくらしいすみやかに えんとおもはんひとみな

恭敬の心に執持して 弥陀の名号称すべし。」

と讃えられた。この時の「恭敬の心に執持して」とは、一心歸命の信心のことである。恭敬は信心ではないが、信心は必ず恭敬である。

三七。愛樂とは、信心を如実に示した語である、第十八願においては他力の大信心を特に「信樂」と呼ばれることは注意しなくてはならないことである。この信樂釈において聖人は

「信樂は即ちこれ……欲願愛悦之心なり、歡喜賀慶之心なるが故に」

と仰せられた。如来本願の大法を衷心より欲願し、満足のうちに好きこのみ、樂しみ愛樂するが故に、欲願愛悦と言われるのである。眞實のよろこびなるが故に、歡喜賀慶之心と、よろこびの文字を四つも綴られたのである。聖人は信樂釈に華嚴經を引用せられたが、その中には、

「若し堅固の大悲心を得ば、則ち能く甚深の法を愛樂せん。若し能く甚深の法を愛樂せば、則ち能く有為の過を捨離せん。」

と説かれてある。仏、法、僧の三宝を愛樂するものは三宝を得るのである。愛樂するに至って初めて真にその人のものとなるのである。信心とは誠に大法の愛樂に外ならない。

三八。信は、本願に相應し、教法に相應した、如実の修行となつて現われる。報謝の称名念仏がそれである。されば信樂釈において特に聖人は、

「論註に曰く『如実修行相應』と名く。是の故に論主、建に『我一心』と言へり。」と引用していられる。信は必ず如実修行となつて教法に相應するが故である。

和讃に云く、

「弥陀の名号となへつゝ信心まことにうるひとは

憶念の心つねにして仏恩報ずるおもひあり。」

「如来大悲の恩徳は身を粉にしても報ずべし

師主知識の恩徳もほねをくだきても謝すべし。」

真実の信心は、必ず生活の事実となつて、如実修行となるのである。されば、信心の者を、信心の行者、念仏の行者と呼ばれるのである。

三九。以上によつて、信は具体的には恭敬であり、愛樂であり、修行であることがわかつた。恭敬の徳がなければ、真実の愛樂も修行も生れないで、仏道を聞くもかえつて憍慢に墮し、二乗を出でないであろう。

如何に恭敬によつて念仏修行するとも、愛樂がなければ、久遠劫来の自力の疑いがあるままであるが故に、信心ではない、又、恭敬し愛樂して如実の修行の生れないという道理はあり得ない。されば、増上信につづいて、増上恭敬、増上愛樂、増上修行と列挙されるのである。

四〇。衆生が、応身仏の草座における正覚を見て、増上の信を起こさないのは、如来の正覚の本質を見る眼を持たないが故であろう。然るに、釈尊の像にして、草座や、天衣を敷いたものは、遂に見出すことは出来ない。如来は必ず蓮華座に於て坐したまうのである。

蓮華座こそ、衆生の上に開かれたる智慧の眼を以て拝んだる、世尊の真実の所座であらう。如来は必ず大宝蓮華王座に坐したまうのである。

四一。応化の世尊も蓮華座の上に坐していられる。その蓮華座こそは、本地の別徳、無量寿仏の大宝蓮華王座そのものでなくてはならない。

特に大無量寿経の会座に於ては、阿難は五徳を念じて、

今日世尊 住奇特法

今日世雄 住仏所住

今日世眼 住導師行

今日世英 住最勝道

今日天奪 行如来徳

と讃仰した。住するとは安住不動の義であるが、奇特法といい、仏所住といい、導師行、最勝道と名は変わり、多少の意義は変わるが、すべてこれ、本地弥陀の徳、超世弘願の一法、本願名号より外のものではない。本仏の大寂そのものに住したまうのである。

畢竟、聖道門においては、寿命にせよ、智慧にせよ、釈尊の本寿本功德として一切を見るのであり、浄土の法門に於ては、本仏弥陀の徳をその所住としたまうと説くのである。

如来唯一の大宝蓮華王座、今世尊の所住所座となつて、生死に威徳を示したまうのである。

四二。

「仏心を蓮華と譬ふることは凡夫の煩惱の汚泥に染まざるさととりなる故なり。」

蓮華とは仏心のことである。智慧を全うしたる大慈悲、大慈悲を全うしたる智慧、自利利他一如の仏心、正覚の全体を蓮華というのであつた。

この仏心の蓮華によるが故に、増上信、増上恭敬、増上愛樂、増上修行を得るのである。何で地上応化の仏の外形皮相のみを見る凡夫の盲冥の自力によつて、大宝蓮華王座を見ることが出来るよう。

釈尊を見るとは、釈尊の人格の本質を見ることである。釈尊の人格の本質を見るとは、釈尊を超えて本仏の威徳廣大を信知することである。本仏の尽十方無碍の徳を信知するもののみ、世尊の眞実の徳を知るのである。

四三。人生は罪濁に満ちている。であるが故に穢土と呼ばれ、生死海と言われる。

しかるに、この生死罪濁に染まざる尊いものが人生に訪れて、衆生の往相生活の本質となり、内容となつて下さるのである。

「泥の中 誰がしわざか 蓮の華」

凡夫のまゝで等正覚に至り、やがて大涅槃を証するということは、有難いことである。

四四。

「一。『弥陀の大悲、かの常没の衆生の胸のうちにみち／＼たるといへること不審に候ふ』と福田寺申しあげられ候。仰せに『仏心の蓮華は胸にこそ開くべけれ、腹にあるべきや、弥陀の身心の功德、法界衆生の身の内、心の底に入り充つともあり。しかればたゞ領解の心中を指してのことなり』と仰せら候ひき、ありがたきよし候ふなり。」(御一代聞書)

これは『安心決定抄』にあるところの

「弥陀大悲の胸のうちにかの常没の衆生みち／＼たる故に機法一体にして南無阿弥陀仏なり。吾等が迷倒の心の底には法界身の仏の功德みち／＼たまへる故にまた機法一体にして南無阿弥陀仏なり。」

とある文についての不審である。そして、それは大事な問題の一つである。

四五。これに対する蓮如上人の答は、

「仏心の蓮華は胸にこそ開くべけれ、腹に在るべきや。弥陀の身心の功德、法界衆生の身の内、心の底に入り充つともあり、しかればたゞ領解の心中を指してのことなり。」

と言われるのがそれであった。

「仏心の蓮華は胸にこそ開くべけれ、腹にあるべきや。」
とは何ということであろうか。

四六。「仏心の蓮華」とは、『安心決定抄末』の初に

「機法一体の正覚成じたまへる慈悲の御心のあらはれたまへる心蓮華を、正覚華とはいふなり。」

とあり、又

「仏心を蓮華と譬ふることは、凡夫の煩惱の泥濁に染まざるさとりなる故なり。」とある。であるから、正覚即往生と、機法一体に成就された南無阿弥陀仏の大慈悲を、仏心の蓮華、又は、正覚華と言われることが明らかである

四七。その「仏心の蓮華」は胸にこそ開くのである。腹にあるだろうか、と言われるのはどういうことであるか。その開くということを「しかれば唯領解の心中を指してのこと」と仰せられた。

領解とは、領受解了の意であつて、善知識の教を領受し、教の如く解了すること、『法華文句』に舍利弗の領解に就て「その所聞を領し、その所解を述す」とあり、それを『法華文句』記五之一に釈して

「領謂外領仏説 解即内受仏意」

という。これ即ち仏の説法を聞き、内に仏の意を受取ることである。真宗では、領解とは信心のことである。

であるから、仏心の蓮華が胸に開くとは、信心を獲得することである。

四八。『入出一門偈』にいわく、

淤泥華者経説言 高原陸地不生蓮

卑湿淤泥生蓮華 此喻凡夫在煩惱

泥中生仏正覚華

これ仏心の蓮華が凡夫煩惱の泥の中に咲き開くことを示されたものである。

四十九。華嚴等では、蓮華とは喩で、日光に照らされて蓮華が開くが如く、真如を開覚するを蓮華が開くという。真言密教では心蓮華を直ちに法とす。即ち心の臓は蓮華の形で、弁が八つあるとする。それで肉檀八葉の心蓮という。困位の間はつぼみで、証を開けばそれが開くを心蓮という。

五〇。浄土門では、正覚華とはお浄土の蓮華のこと。正覚即蓮華である。その正覚華から化生するものが浄華衆である。浄華衆の胸中には信心の蓮華が開いている。であるから『安心決定抄』には「他力の大信心を得たる人を浄華の衆とはいふなり。」とあり、「これはおなじく正覚の華より生ずるなり。」第十八願の世界の尊い哉。

五一。名号は如来正覚のすべてである。したがって名号は弥陀の身心の功德すべてを内具するところの功德大宝海である。この名号を回向されて大信心となる。

「弥陀の身心の功德、法界衆生の身のうち、こゝろのそこにいりみつ」と言われるのである。

五二。

「仏心の蓮華は胸にこそ開くべけれ」

「しかればたゞ領解の心中を指してのことなり。」

この蓮如上人の御答えは真宗の大事な問題にふれているのである。

領解とは、外、仏説を領し、内、仏意を受くる、ということであった。したがって、真実の領解はただ無我に教を聞くことによつて開けるのであり、決してその人の独断や、ひとり決めではないのである。合掌して如来本願の意を聞入る所に、自然に開發するのが信心である。

もしいくら聞いても、我によつて聞いて、仏意を解することが出来なければ、仏心の蓮華は開かない。であるから、仏心の蓮華は、聞其名号信心歡喜と、本願成就文の相において開くのである。

五三。「腹にあるべきや」とは、腹とは教を聞き仏意を領解することなくとも、本来、衆生の心の底に尊いものを本具するという考えのことである。即ち聖道門の本有の仏性を指すのであろう。

もし常没の衆生にして、本具の仏性ありと考えたり、あるいは「弥陀の身心の功德、法界衆生の身の内、心の底に入り充つ」ということを、そのまま横着にとり込んで、聞其名号信心歡喜と明信仏智の極難信の関所を回避して、第一義の問題からそれて、他力信心の大道を直進することなくして、しかも「吾等が迷倒の心の底には法界身の仏の功德みちみちたまへるが故に」と言うならば、それは恐るべき邪見である。『安心決定抄』が問題になるのも、こうしたことのためであり、蓮師の卓抜した識見とみ教が尊ばれるのも、かく一切を正しく生かして用いられるが為であらう。

如来の身心の功德は余りなく衆生に廻向せられる。けれどもそれは真実教を聞いて信心の開發された胸においてである。すなわち、教えによる自覚の世界においてである。

五四。信卷末には、善導の『散善義』を引用して仰せられる。

「三には、若し能く相續して念仏する者は、此の人甚だ希有なりと為す。更に物として以て之に方よぶ可きこと無きことを明す。故に分陀利を引きて喩と為す。分陀

利というは、人中の好華と名く。亦希有華と名く。亦人中の上上華と名く。亦人中の妙好華と名く。此の華、相傳へて蔡華と名くる是れなり。若し念仏する者は、即ち是れ人中の好人なり、人中の妙好人なり、人中の上上人なり、人中の希有人なり、人中の最勝人なり。」と。

分陀利とは白蓮華のことである。以上の文によつて念仏行者の重ぜられること知るべきである。

五五。行巻に法照禪師の讚文を引用せられる中に、

「此の界に一人仏の名を念ずれば 西方に便ち一蓮有りて生ず。但一生常にして不退なら使むれば、此の華還りて此の間に到りて迎ふ」といふのがある。まことに趣き深い表現ではある。

信心の開発は、如来本願によつて世尊の教法を聞信することによつて成就するのであり、それが心蓮華と言われ、その信心より流出する念仏は一一が決して無駄事にならないで、「此の界に一人仏の名を念ずれば、西方に便ち一蓮有りて生ず。」と、一一のお念仏がお浄土において蓮華となつて咲き、それがもし一生不退の相續を得るならば、還りて此の華がその人を迎えに来る、と言われるのである。汝の往生すべき浄土は汝の念仏によつて莊嚴せられるとは、不可思議の本願の世界ではある。

如来の正覚も蓮華であり、蓮華より生れる念仏の行者も浄華衆と言われ、念仏によつて浄土に浄華を生ずと言われ、何もかも蓮華の中に撰められるのである。蓮華とは如来の正覚である。浄土を蓮華蔵世界と言われることも肯かれることである。

五六。

「何として仏心の蓮華よりは生ずるぞといふに、曇鸞この文を『同一に念仏して別の道なきが故に』と釈したまへり。『遠く通ずるに四海みな兄弟なり』、善悪機異に、九品位かはれども、ともに他力の願行をたのみ、同じく正覚の体に帰することはかはらざる故に、『同一に念仏して別の道なきが故に』といへり。また先に往生する人も、他力の願行に帰して往生し、後に往生する人も、正覚の一念に帰して往生す。心蓮華の中に至る故に『四海みな兄弟なり』といふなり。」（安心決定抄）

念仏の行者は、同一のみ親の御念力によつて生れて、同一の願行に帰し、やがて同一の心蓮華の中に往生するが故に、四海の内皆兄弟と言われるのである。如来浄華衆は、正覚華化生して、やがて同一の蓮華に化生するのである。

五七。行巻御引用の法照禪師の文の中にいわく

「正に契を浄華台に結ぶに値へり。」と。

又いわく、

「借、問ふ、家郷何れの所にか在る。極楽の池中、七宝の臺なり。」と。

一切すべて如来正覚の蓮華より外にはない。六道はるかなる旅路にあつて救われるも、蓮華を以て乗物とするが故であり、帰りゆく家郷もまた極楽七宝の蓮華である。

善導、嘆じていわく
「一念、華に乗じて、仏会に到る」と。